

第3学年 国語科学習指導案

日時 平成26年9月30日(火) 5校時
学級 3年1組(男子14名 女子16名 計30名)
授業者 教諭 松田 弘恵

1 単元名 5「いにしへの心と語らう」(光村図書)
教材名 君待つと 一万葉・古今・新古今

2 単元について

(1) 教材観

三大和歌集である『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』から15首の歌が取り上げられている。成立の時代はそれぞれ奈良時代後期、平安時代の初期、そして鎌倉時代の初期で、三つの時代を背景に壮大な時間の中の和歌を味わうこととなる。生徒達は、古典単元の導入でもある『古今和歌集一仮名序』で、「言葉には人を動かす力がある」という強いメッセージを受け取った後、この教材で多彩なテーマの和歌に触れる。そこから、言葉のもつ力を通して自然に対する感動や人間に寄せるさまざまな愛情などを味わうことができる。さらに、現在にも通じる人間の感情や生き方を学ぶことができる教材と考える。

また、和歌を繰り返し朗読することで、日本の詩の表現リズムを味わい、楽しんで和歌を読み進め、そこに込められた昔の人々のものの見方や感じ方、そして考え方について共感、あるいは理解を深めることができると思われる。

生徒は、この教材で和歌の味わい方を知り、さらに「和歌に関する鑑賞文を書く」という言語活動を通して鑑賞の気づきを広げ、豊かな感性を育むことができると考える。

(2) 生徒観

素直で伸びやかな生徒達である。発言も多く一見積極的に見えるが、発言をする生徒は限られている。しかし、全体が自分の意見を述べられるまでには至らず、表現活動が苦手だと感じている生徒も多い。そこで、本教材を通して和歌の味わい方や自分の言葉で物事を考え、文章を書くという力を養っていききたい。グループ内で分かりやすく発表することや説明する機会を増やし、互いの評価活動を通して、学び合いを深めていききたいと考える。

(3) 指導観

1学期の後半に俳句を学び、鑑賞文に挑戦したり、創作活動を試みたが十分に出来なかった部分がある。「和歌を豊かに鑑賞する」ということを学習活動の中心に置き、「短歌の味わい方」を身につけさせる。「味わい方」として生徒に捉えさせる観点を次のように絞る。

(1) 味わい方の観点

①音読	②歌の意味の理解	③作者(話者)の状況理解
④作者(話者)の心情把握	⑤表現技法	⑥作品全体のまとめ

さらに、そこから「説得力のある鑑賞文には何が必要なのか」について気づき、文章を書くという学習活動を行っていききたい。気づきの観点を以下のように具体的に捉える。

(2) 説得力のある鑑賞文の観点(「味わい方」の観点③④⑤をさらに広げる。)

③作者の状況理解	位置、状態、視点、場面
④作者の心情把握	心情表現語句、句切れ、体言止め、助詞 助動詞
⑤表現全体	読まれている素材 表現技法(比喩、擬人、対比、象徴等) イメージ語 視覚、聴覚、聴覚、触覚、味覚

生徒達はグループ内で相互に批評し、評価する活動を通して、自ら考え、自分の読みを確立していく。そして、その上で自分の言葉で書くという豊かな鑑賞文指導を目指していききたい。

(4) 言語活動を活発化するための手立て

鑑賞の方法を具体的に理解し、グループ活動に積極的に参加することで、主体的に感想発表や鑑賞を行う活動とする。積極的に交流し合う姿勢を作るために、気づきの観点を設け、和歌の理解に努めながら鑑賞文の手助けとなる方法や工夫を見いだすという手立てをとる。「どうすれば説得力のある鑑賞文になるか」という気づきと発見から自己の鑑賞を深めていく。

3 学習内容の系統【伝統的な言語文化】

1年 いにしへの心にふれる ・音読を楽しもう いろは歌 ・七夕に思う ・蓬萊の玉の枝「竹取物語」から ・今に生きる言葉 故事成語

2年 いにしへの心を訪ねる ・音読を楽しもう 平家物語 ・扇の的「平家物語」 ・仁和寺にある法師「徒然草」 ・漢詩の風景

3年 いにしへの心と語らう ・音読を楽しもう「古今和歌集一仮名序」 ・君待つと 万葉古今新古今 ・夏草 「奥のほそ道」から

4 教材の指導目標

ア 関心・意欲・態度	イ 読む能力	ウ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
①和歌の世界に触れる楽しさを味わわせ、進んで作品に向かう態度を育てる。	①歴史的な背景やそれぞれの和歌集の特徴を捉えながら、三大和歌集の代表的な和歌を読む。 ②昔の人のものの見方や感じ方を捉え、好きな和歌を選んで鑑賞文にまとめさせる。	①発音や言葉遣いの違いや効果的な表現、古文の仮名遣いなどに注意しながら朗読する。

5 教材の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 読むこと・書くこと	ウ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
①朗読して古文のリズムに親しみ、昔の人のものの見方や考え方を捉えようとしている。	①それぞれの和歌集の歴史的背景や特徴を捉え、和歌の鑑賞に生かしている。 ②人間や自然、社会などに対する昔の人の思いを読み取り、鑑賞文にまとめている。	①助詞の省略や係り結びなど古文特有の表現に気づき、古文と現代文の言い表し方の違いを意識して朗読している。

6 教材の指導計画と評価（5時間）

時	主な学習活動と生徒の思考の流れ	評価規準	評価の方法
1	①「君待つと」の学習の見通しをもつ。 ②教科書教材の15首を音読する。 ③15首の意味をおおまかに捉える。 ④15首の意味を確認し、自分が気に入った一首を選んで感想を書く。 〈15首を音読して、自分が一番気に入った一首を選んで感想を書こう。〉 ・この和歌のどこがよいのか。・どんな所に惹かれたのか。	ア① すらすらと音読した上で、歌の意味を汲み取り、情景や作者の心を想像して感想を書くことができるか。	ワークシート 音読
2	①全15首を通読する。 ②「万葉・古今・新古今」についての基本事項をおさえる。 ・三大和歌集の特徴をとらえる。 ③自分の選んだ和歌をグループで発表し、選んだ理由を発表し合う。 〈自分の選んだ和歌の感想を発表し、他の人の感想も聞こう。〉 ・他の仲間がなぜそう思ったのか。感じた理由は何か。	イ① ウ① どの言葉や表現からそのような感想を持つことができたかを説明できる。	ワークシート
3	①短歌の味わい方を理解する。 ①音読 ②歌の意味の理解 ③作者の状況の理解、 ④作者の心情把握 ⑤表現技法 ⑥作品の全体のまとめ ②選んだ和歌の鑑賞文を書く。 〈鑑賞文を書くにはどうすればよいのか。〉 ・そのためにはどんなことに注意すればよいのか。	イ② 学んだことをまとめ、語句や表現技法の知識を踏まえながら選んだ1首の鑑賞文をまとめることができたか。	ノート記入 ワークシート
4 本時	①鑑賞文を発表し合い、グループ交流で良さを見つける。 ②補助資料から、何に着目したらよいのかを考える。 ・作者の状況理解 位置、状態、視点、場面 ・作者の心情把握 心情表現語句、句切れ、体言止め、助詞 助動詞 ・表現全体 読まれている素材 表現技法（比喩、擬人、対比、象徴） イメージ語-----視覚、聴覚、聴覚、触覚、味覚 ③説得力のある鑑賞文を書くために、評価活動を行う。 〈説得力のある鑑賞文にするにはどうすればよいのか。〉 ・根拠とする観点から自分の言葉で文章を書く。	イ② グループ活動に積極的に参加し、主体的に和歌を理解し、鑑賞文を書こうとしているか。	ワークシート
5	①選んだ和歌について、1枚の表にまとめ、発表する。 ②短歌に表現されたものの見方、考え方、感じ方を理解し本教材の振り返りをする。	イ② 鑑賞文を発表し、1枚の表にまとめることができたか。	学習記録用紙

7 本時の指導

- (1) 本時の目標
 ・説得力のある鑑賞文を書くために、話し合いに積極的に参加し、鑑賞文をまとめることができる。
- (2) 本時の指導構想
 ・説得力のある鑑賞文を書くために、何が必要かを考えることができるようにし、語句の意味や用法などから和歌に詠み込まれた心情を的確につかんで、自分なりの考えや言葉で鑑賞文を書けるようにする。
- (3) 本時の評価

観点	B おおむね満足できる
関心・意欲・態度	話し合いに参加し、グループ内の交流を通して、感想発表やや鑑賞文の相互評価をすることができる。
読むこと・書くこと	短歌の味わい方を生かして、より深い気づきのもとに、自分の言葉で鑑賞文を書くことができる。

(4) 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点 教師の支援● 言語活動を活発にするための手立て★ 評価の観点◎
導入 10分	1 前時の確認をする。 ・前時での鑑賞文がかけているか。 2 15首の通読 3 鑑賞文を読んで仲間の良いところ、素晴らしいところを発見する。	★◎限られた時間内で回し読みをし、文章の良いところを記入する。 グループ発表。
展開 35分	4 本時の学習課題提示 説得力のある鑑賞文にするにはどうすればよいのか。 5 鑑賞文 A (補助教材) を提示し、「説得力がある」とは何かを考える。 ・何があるとよいのか。 作者の状況 位置、状態、視点、場面 作者の心情 心情表現語句、句切れ、体言止め 助詞 助動詞 表現 素材 表現技法 イメージ語 視覚、聴覚、聴覚、触覚、味覚 6 仲間の鑑賞文を読んで、さらに付け加えたい良い視点を発見し、気づきを伝え合い付箋にメモをいれる。 7 自分の鑑賞文を生かし、さらに推敲して文章を練り上げる。	★鑑賞文 A の提示。 ★鑑賞文 A と自分の鑑賞文の共通や相違点を見つける。 ●さらに何があればもっと良い鑑賞文になるのか、グループ内からの気づきをメモし、伝え合う。 ・付箋の活用。・ワークシート ◎アドバイス付箋を入をもらい、気づきの発見から自己の鑑賞文に生かす。 ◎気づきを文章に生かし、自分の言葉で表現することができたか、
終結 5分	9 本時のまとめと振り返り 課題の答えとして説得力のある文章にするにはどうすればよいのか、気づいたことをまとめる。 使われている言葉を根拠にし、それに基づいて、自分の言葉で表現することがよい。表現技法の使い方を知り、作者の心情や情景を詳しく捉えることができ、文章にすることなどがわかった。	・ワークシート記入 ・1枚の表にするためのまとめ方の提示
	10 次時の課題を知る。	